

国際交流

世界に広がる学術ネットワーク

今まで大学間協定は29カ国・地域55大学、部局間協定は9カ国・地域17学部等となりました(平成27年4月1日現在)。平成24年10月に、秋田大学初の海外拠点「秋田大学モンゴル事務所」を開所し、平成25年4月には、二つ目の海外拠点となる「秋田大学・チュラロンコン大学共同研究所」をタイ王国のチュラロンコン大学内に開設しました。また、平成26年10月には北都銀行バンコク連絡事務所(タイ王国)内に「秋田大学バンコク事務所」を開設しました。

今後も、協定校との学術交流、学生交流を推進し、積極的な国際交流をすすめていきます。



秋田大学バンコク事務所(平成26年10月)

資源に挑む 秋大の「舞台」は世界へ

資源を持たない日本が、いかに資源を獲得するか。レアメタル、資源ナショナリズム、都市鉱山といったキーワードがメディアを飾る今日、世界が資源を軸に回っているのは誰の目にも明らかです。各国が資源の「争奪戦」を繰り広げる中、秋田大学の存在感が高まっています。

資源探査、採鉱、選鉱という資源開発の一連の流れを学べる国内唯一の大学である秋田大学、ここに全国から資源分野における第一人者が集まり、日本を含む世界から留学生、研修生、研究員を受け入れて、資源開発のエキスパートを育成しています。

この取り組みの中心となっているのが、平成21年10月に設置した秋田大学国際資源学教育研究センターです。資源学研究に特化し、資源開発における研究拠点を目指しています。工学資源学部を母体とするセンターですが、センター教員が長期出張しやすいようにと、全学センターの施設としています。

センターが現在、力点をおいているのが、資源保有国への技術支援です。センターの設置は、アフリカの資源国・ボツワナ共和国政府から秋田大学に、資源系技術者を育成して欲しいという要請を受けたのが発端でした。

自国で資源を持ちながら開発に困難をともなう国々へのノウハウ提供。ボツワナ以外にもモンゴル、カザフスタン…。他の資源未開発国への技術支援も始まっています。

前身の秋田鉱山専門学校創立から数え、100年以上の歴史を誇る秋田大学。地方の大学でありながら、いわば「資源外交」の一翼を担う立場として英知を集結し、将来につなげようとしています。

知の協力が、日本の資源セキュリティ・安定供給体制の確立につながっていきます。秋田で長年培った技術が世界に挑みます。

